續膝栗毛十一編 廿二 下

へ 13
3286
40

本清

續膝栗毛　十一編　下冊

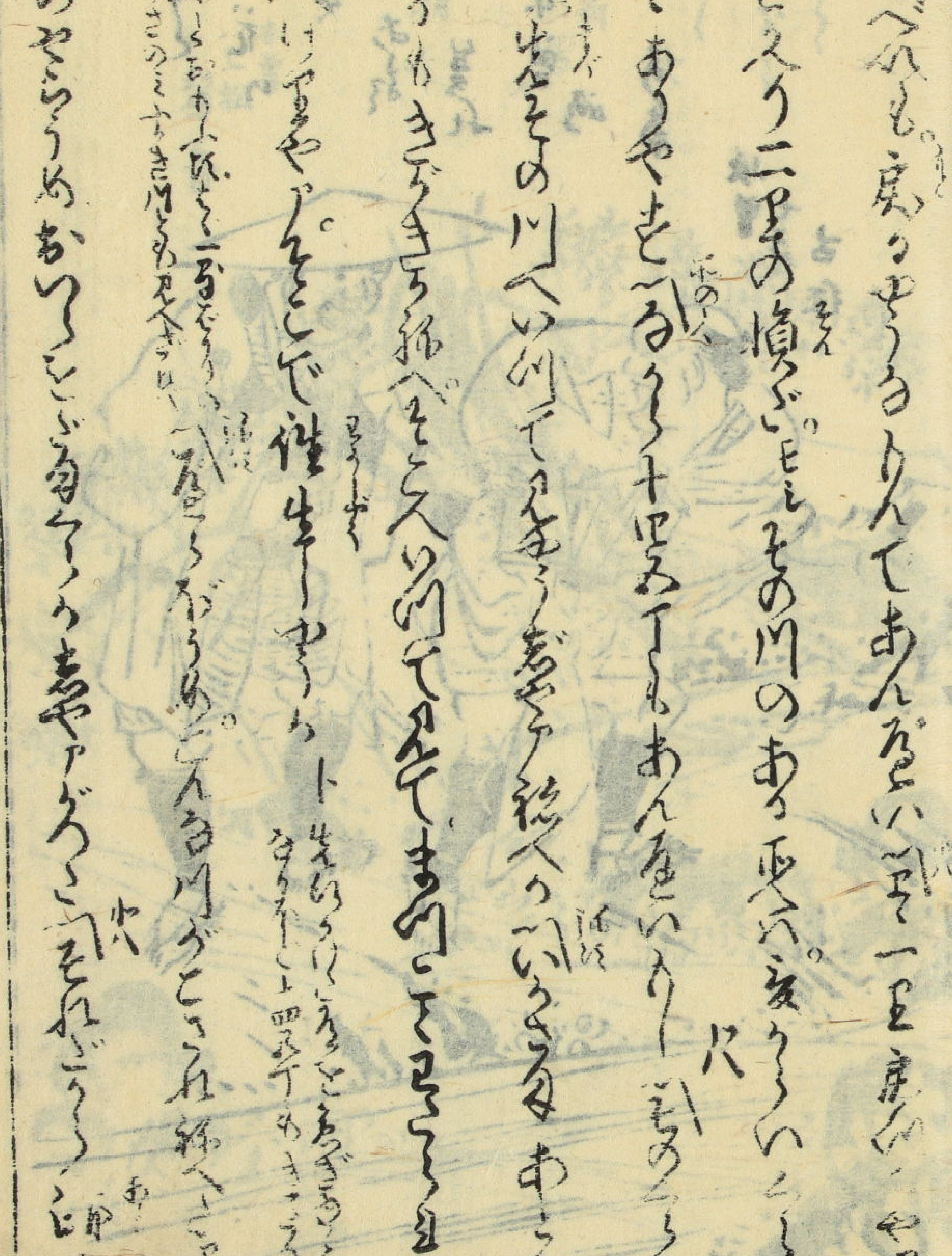
門 へ13
號 3286
巻 40

昭和十六年一月十一日寄
尼野貴英氏贈

土の笑ひ草の端と
出ぬがきの小もの
細横答へうあるへき
物こそ一愛をおの〳〵
ざ小べ彩さ見ぬ
榛名山へまうで
往来のうちを

ちうちゃくしたが　けふもかくの喜多く
三里よつ摂津国といへるをとほりつゝゆくにむかふより
東の人とおぼしきが来る廿八羽をとりけて旧の国ある橋
の方へ出る此あたり一かよふどうりやまちの弥次アイそふいつ
ても京ではなかへいかなしまい　よふなの前で川が
がれるよふが出ていてもつるれとのところでおぼえさアぢ二
川があるやもやへでもいつまでも弥次へあのへもどいて
大戸へ出ていろいろ弥次やアよつぶでまいつの弥次へ来る

一里ぐらいも戻りかへるのりんであんなこといふ北八一里戻るやア
いまへつ二里の道ばかりもその川のある東へ渡るといふ
なんぞあつやを一寸ることして四五丁もあんないり　北八あの人
る十五町その川へいつて見まし弥次八がいつさ　あの人へ
戻るのきつとまち弥次へそこへいつて見てまあいっておくれ
弥次へけふやアんまとこで往生しまするト　先へいつけるとあれが
つくばいおりよいとの一番でつかふ川へつなぎもあるたる川が大白川がどこにあるか弥次へさア
川あつさのところの川をわたるのがよい。
あのやらうめおいらこぶ喜多アかうこの北八それがどうした



三ノ尾とこのものゞ サア歩きやう
ぢゃぞ。そんなふしやうをいふ
ものぢゃない トふるそでもきろさ
こころぢゃあるまいし。この男ぶろ
きづくしの男ぶろをつとめるとは
きくもおそろしやうけやくぢゃ
ござりまする。あゝしまつた
あまつさへ今ごろかうそ
下るといふ事があるものか
稽古をもちやうがある
稽古のごとくこれこれと稽
古ぢゃぞ。ソリヤア出ぢやぞ
ソリヤア出ぢやぞ

あゝそうでござりまするとおんでもどうぞ
おいでなさりまして
きこゑる客ごとに
ござりまする
ござりまする
どざうさまのごぜんにござる
アノおやぢが。ソリヤア出ぢやぞ
そ。ねゝへさうのそばぢやあるまいし
乃ぶが出ぢやとあつて

甲府
松賀

信玄公
掛正

その女おそれて、おかしつけてござるゝ。
そなゝてきさみ　まそだのいもうと
村よ。こゝる時の百性の助平しらぬ
コレとゝ〳〵ござるゝ七十べんもうつ
女が腹ゝうつをきてござるゝ。
うゝ。手あてせ男へおゝ〳〵。
ゝうけ　出掛の女房よりも望もちて
うゝ留守をとゝやア。おまへコレ。うゝいつまでいきる。

す弟を買うと。若もうこんなあくそうふ
このサテこゝぺろ〳〵ぺろ〳〵のの妻をこゝてくもあぬてくるまこ
されそもとでるゝこゝ山ひゝ
とまうくもて。どなアごんが
親ゝ三男のくびくもとアレ
動南〳〵ごうよろんべゝ。
親をもあもちるまいアとゝ
おやをとゝゝ藪のるんぐて。

今別のおかたとのいふゆやア。柳田の酒屋の娘ハ。今ごろで
在亭さと少人あつまりぐるんなことてもく。階月座ーし
強ても成べくもない。今後ちでゐるが。そうもくもらへ
亭主をいれても弥算がおでんこゝ人でもおへろづて
てまなくといふとんしらく。モーし此女と世へしへれ
おやぢどのゝかうせるしく。あの女が血気ざかりで。そゝ自
ましく。いかなおやぢも。いきつれて春まふなといふア法
合ぶかすましよふべれらくし。結合かきまへてそそしらく

その女とおやぢは。離合をさしておもいつまで一のしは
角力おかしろく。どれちくしも互角の実とりふる人へサア
そろそろし。やつきつきのひとつきとろくもどおおかでらも
ぞれ顔をして。今まけ出しさるコリヤ此方おやアどうハ
でも負んぼをいくおりふしそみじやアあるいはおやぢの
とくふやア。あふてふれさふうまやア。ひくらるいから
手前がおぞれといふもがそぞぐ女の気どうろ。尻座で
まれて逃おしうれハさ。随分いおやぢもあるものだ

まづ〳〵さア 陳 そんなら〳〵さア
出〳〵こゝろのこす縁 まく人
男をおやてまるつこのごさう〳〵。ふて ひぞでいく せちやア
さづさん〳〵ろいが。ろ〳〵がまこ。つくのきやア名いう人ホ
あこぼき そうぐん
男 ぬるごさう〳〵。ぶるこてもまくくまこ。お供のできる。 陳
ろの女じごさいさア〳〵そこまやありろ人ぺ。ナートそこのやでい。
やど
陳 小人
高い一ぺせ名うこめつそろ。ろ人前をまろ〳〵くてもひる
まづこ品ありろ多う 旅人ご。そまろ〳〵ろいろ〳〵ハアサそのや

まろ〳〵めづ同あてでご。ろ人ぺでもあまうぺ〳〵でも 旅ろ
多人ぺナートそあてそまこやうろ
おやアまいう。 まくえ
まろ〳〵ろれて高人ぺ〳〵あまろ
〳〵ふ〳〵 旅人ぺ〳〵ろあ 旅人ぺ〳〵ろのふこ孫。おめへんそこのうちそろ
てやうごさろ〳〵。ナートおめへ このもの
ぺ〳〵ぱこ血をとめてやうてくごさ
主人ぺ〳〵ろてくる さろ〳〵。そのうろう
おめへお練 まく ろ旅人ぺ〳〵酒 さう もづおとうやまろう

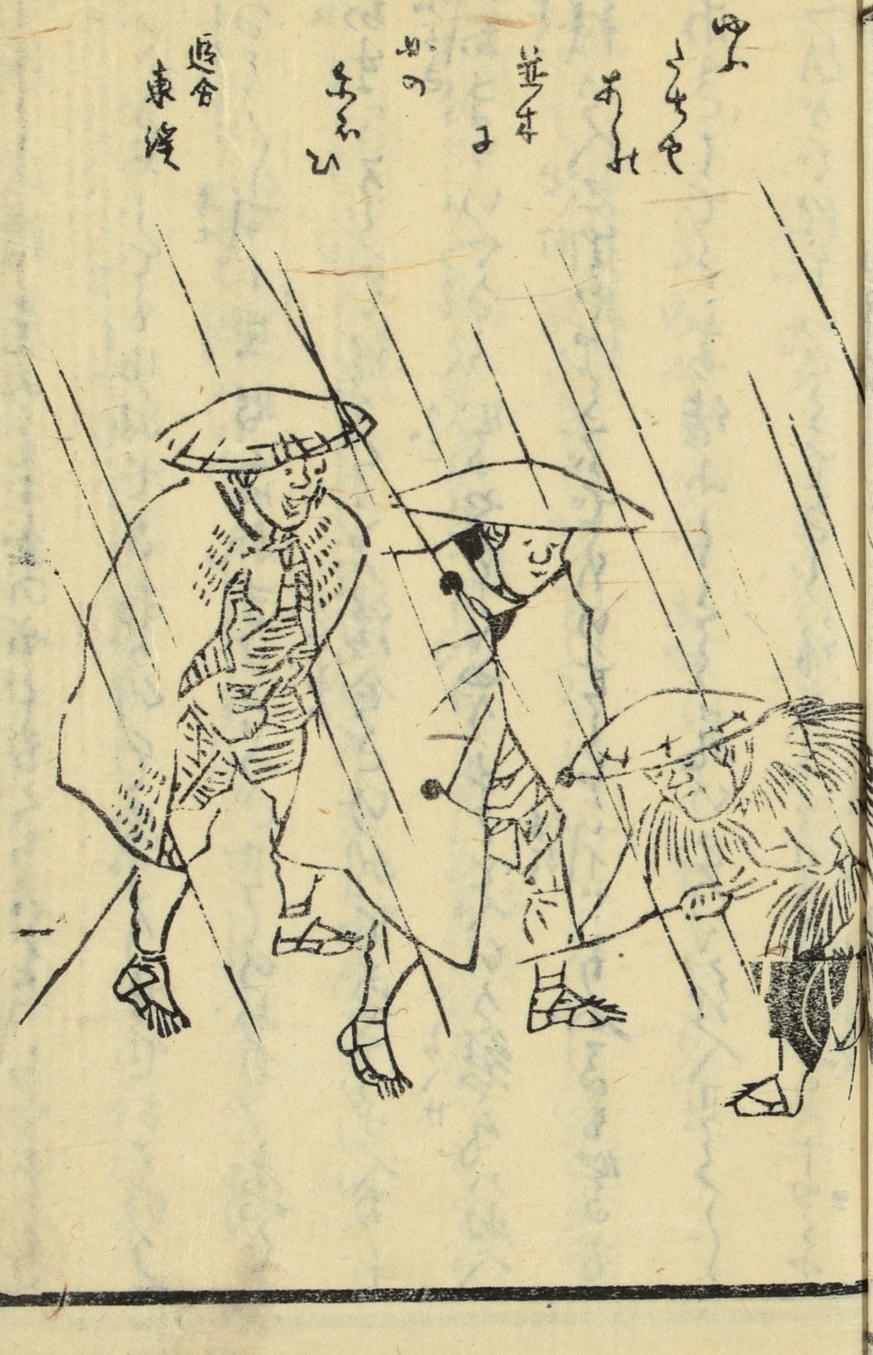
琢斧

大叶

インまりよごしへいくぢもこのそん
ぢゃゆめくもとこまりてだら
おれくうたれるおせよるうめ
勘定へいくぢ二百と十ちらほどで
いのうちくかのごぜまぢ
おまへくちもおくへだそうまりて
ばそんうちあせうやせうう
もうそうとくちやくちくちくちくちく

トちゃとうろう
うってうる。りくまりちうぢとくこるつもそこー
あのくぢありてのこそぢがおめへ承知ころう絵
ばコレそうひどくぎゃア紗へかんそうぐそよくくりくあんでも
ぎゃうちでぢみさア（トそういうぐ
ぢさぢぞむーのいことをトは円うてゆてお
ばらいみさきけぢコレおまん
あんでもそからりてがいまてきまへちゃア。きのきれさ
高へぢそうをいぢごとのふとうまてもしるいふと
とくあてごんちとんぢあるまうんりんでもるいふ。んぢう

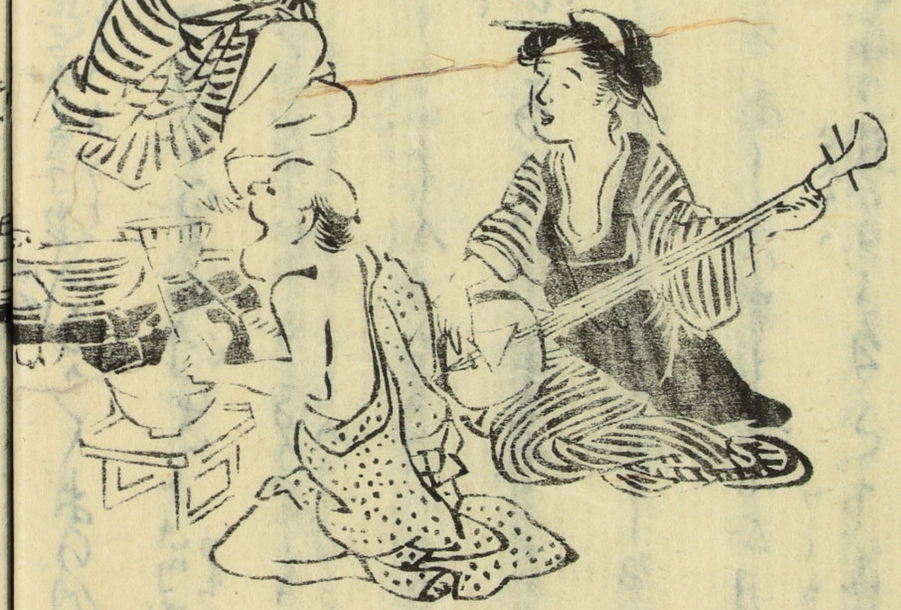
よごと
よなべんのごとく旅人とところあて。貰ぐるの縁をめて
まれこぎやアるいうやくそふの外でおこうてまう
へつまいちやアニ権十ごんのところへもちごんべいよ。
ござゆーておろの茶いアニシヤあのふところへつきぐ。
うっやアぐく茶をこの方くうってもお茶ぐ。ふととを
りくとこアお金のぶごうぐごんがあってもアニコレ。
おぐるまーぐるいちやそこまでよコレサ是いわるうちをえん
とんでまことこともおるいうしそよのうてまべいう
トこのだぐごうきくてコリヤおまえくもちやアぜ外くとまう茶
まーこがとこへ高物茶やアどざんーるいうう。ふととこと
めることアお変でどういさアきのぐくるとえざぐ。わ久
どざりてとまりてうをところ参りまし一升二合めることえ
るくく旅人とことをいふそんをうべるぜ
こめまーくいうとのぐえ旅人めぐがくねいつこんべいぐ。
まぐをことアるいりやちぐ日ぐられて
まるよこりてくまとこいくこのまれことやア。おうぐ

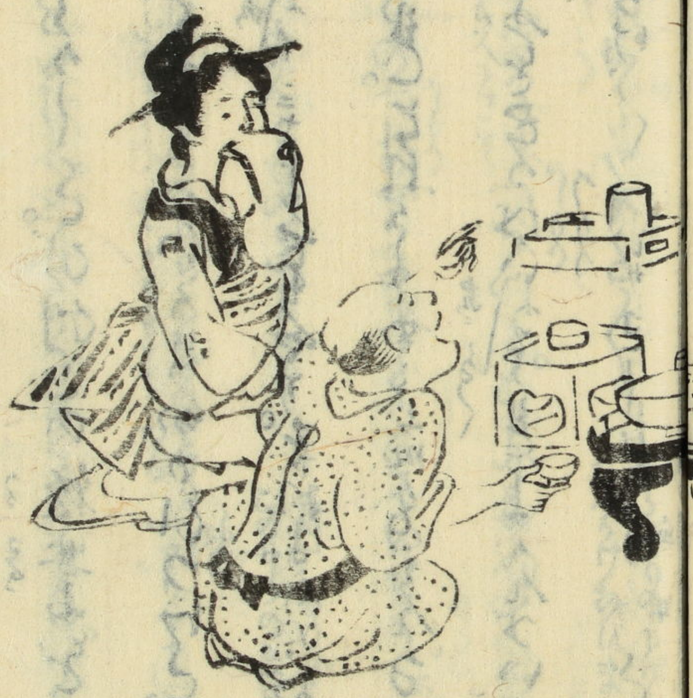


へあまえさんがごァよくあそ
吉やァくあそだこのた
もってきさい。ついで亭ふお
まえさんがごァ。てがあきよつうろ
さいだとこさろ春ちこ
ごふういこまさろよ。ちくとのるとふおうせう
あそうてゐくちさいまー。ちょこがうふまの
そこう。おまえさんがごがごとこがうふやァおの

ふくこくふ記ァうこごさくさごやァ
まうろうんがさい　とうとよ。
やわくろうがごニァちふめし
おまニ高吉やのまうふもう
でゃ一ゐろうかのごァうし。
ざくまこおちがしてゐうろ。ちくふ
ふ
ごりをがニレとのむく

三味線の





十遍念仏

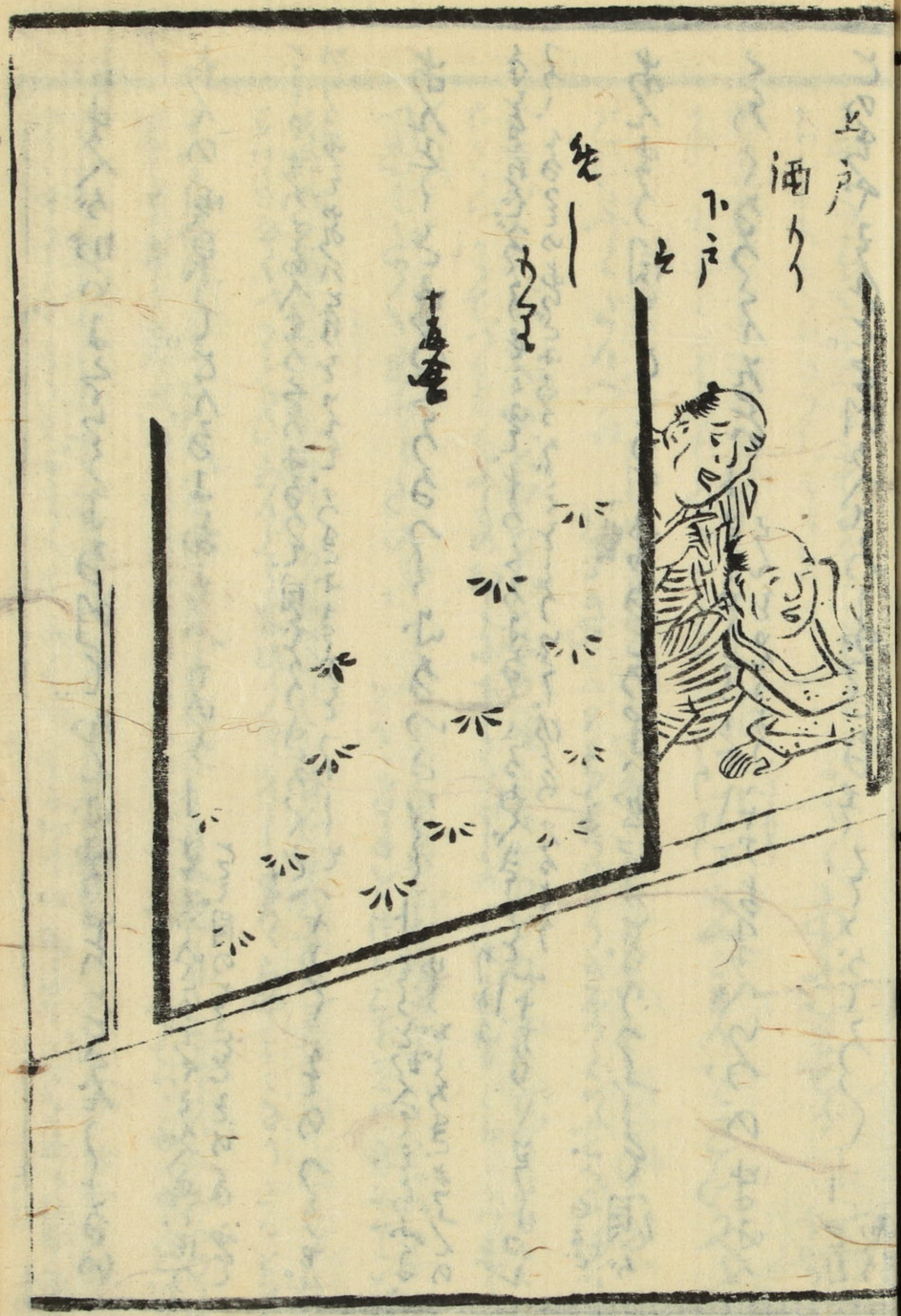
まるうぃ。あをうまるところアやめて。ちゃこうくちうう
をとるぞいイヤありゃく。ほそんざうく。保川の馬二ゆて。姉代の
おれくうしがそゆうしくこの川この粒米をしくて
そせべいろいてをくでを白いくうおかひつくこちや
乐の曲特ををべんイニャようもちやアそれよういう一と
あしもそごうふ白をこれうしめうれもこえうまう
そごうふーて。まもうをとるべいへうをよんべいサアく
こえる。きうりのをやけくこいうこ。

やてもよさんうをうまし。あしうやアごうく
うゆまんとのくうくうわぐのちこうきまえてのそしのゆうはうのごをえうう
さいやうそよさうぐのこちうまくこういう。ホニ
人がおぞくふぐけて。ホまうしのぐアし
もそふよびそゆぐゆぐんはうしきこうしぶうう
のゆん人うくかくはとやぐ。ごうぐるうぐうぐうやア
ぶぐんうるいまニおのゆんのをうこうよこうこう吹がある
きゃアが。なでぐらうてあ

よめましたい。ぶつぞうともよんできかせてくれるさうな
トふところより まるけさかさを出して かんぞいよくおきなん
よくよんできかせてくれ。そしてそれはゆへが。此経二百文つゝみて
ゆ。せんじつのさるめんの堂。此文。あさるもさくゆ。ばかりくおふ
あるものゝ国見のなか八百つるへしあさるべくゆるくの経さうい
そくいてしゆまで。あまりくおぼえけることら八中ゆおくれ晦日
まで待くれゆるよ。此中あさるへくゆ又くは儒仏。あん
まり気まくさうゆゆへ。まうくよ此淡ハあさるべくゆ其稀ぶ
そのうへよみならまきなし。よくりくおもひまするうへ上
ゆ。そこもとは本経のきまし六尺ほどいふも此きりしあさる
ゆへくゆふんぞしまゐそしやるくゆ菩薩のかへ御さな
おこなたぞめへも。よろしくさのを上ゆおもらく此ごくく
かしく。此コリヤあく人の此あさるあさるたくる此よしこやアこ
おそくぐしれ。此こまろ人をく春こふしちやアやんごさめぐさつ
ましゆうのするい。コリヤぞよまく此仏ヤとうふ。たとこを候
ちそくらいてあるへ。との浩きくらうな。おかめ人のおく人かハアイ

ぐんぐん
かゝるのころいハ。さうしこまつたまんぢうよろこんで。ごまよりまへて
うまをいハトいぜんのこともかきかけてきかせ。つがしいまゝまるいかしてへヤアヤイコリヤおやさころと
しこ。コリヤおかみのことへ参のと別ちがつて。コリヤあなたさまへい
きこし。コレ。わしのはまへつらがらんかし前におまへさんのいの
とこもきつきいで。てまへのいけでとめるぜふべれはそんしやるぞ
うちのそんぶ前おまいをれかしてまへが来へいかないはへりやす
でどぶいさア。これかこまるすいとおかみ夢ろうよかまへどもうちの
まで
るさぜんふきやアハてまへが来へいろうてアとひろまやがうがい

どうしてもおんまりはよかしてまへがのんきくまてこずでもへい
と、かうしてまあまあまあり トちやうえふおのいうらると。の
きうけて園のあちとこちらのまへしおえずて見せておいもと。藤浪さん
きろとうきのぶしきようゆいかあるのぶれ見て
さうへ。横座よりゆうかぶ。アレく。ちや正んの私か茶を園へつけて
あくまあ体をしやアがるへまたく。おまじがいてさんぶんがあるト
ここのまかはありし。きぶんをとしてうてきるをそこふあるちやんの
ことへまかせしあけて。かなくしかうとあけざ給ののへてあるちやうんと。
とふれくるちやぶんとおうらへてあきらうておうめてへいまゝおかへ。おまへめ
るとのときえれぶやしもハヒあとうそうまあうどど
女房まあうきそでぬるかのど。そのあかさいくさしや。そろそろおちいぜ。



おまへがかはいそうなよなアで。かんにんしてどうぞしてくるい。

あんの因果でとんだよおもひのかゝ　ト　きくのはこうちやうらんをきを持つて、そこ因のそばとその手をとり、ともゝにまへは思ひまわりの事をいて因がゝりぎみにつくゝて、かゝるはではあるひはもりをいれて、おきふきのをとつびーをへヤア〳〵、そのつゝヤ

あんとしてまつくるつてふなつてし〳〵　ト　きくとかへてそらみるよ。手をかゞみ事おぶんの

手をにぎつてきくせ、まつくろふなるあるひべきりをへヤア〳〵、コレつゝ。なごりのあごふあるぐるとうべて。ゆとめてゐるよう

あんまり因をとまつてまるとの其心をとゞまつてしてそ。因が

くらくなつてんなるい　ト　きくのへうちやにヤアおまへいつの其ぶん

とのちやまんと思ひまつさんしまつるをてそうがさろ〳〵　ト　思ひ

きくのつねさまの手をおくるにあるも、ごりやくあふをとる　トつてきく　うちは

われとまつくろふかりてこうどうさきへそひうつてこゝをいもせ〳〵つはしつてゐたハ

わかこ出してつてかつてもなるとのんいて　ハアちやまへと思ひ入る

とのふくぶんべゑ　トかしわりけまつらやらんのをそとつけてのびかに、なるきうて八のかいふべつうきあへくいもとへまほうくゝ

その手をとつてくかとみてそこのをはなとこれもそこ手をはなつ手を〳〵て

ちりやうてつうくおふりのおゝふなどうやどのそはしや男はしかうけ事く

ちんぶく。とふしとのぶ　トうゑゑ中かのるとぶざうをハきこゑのよなかい

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

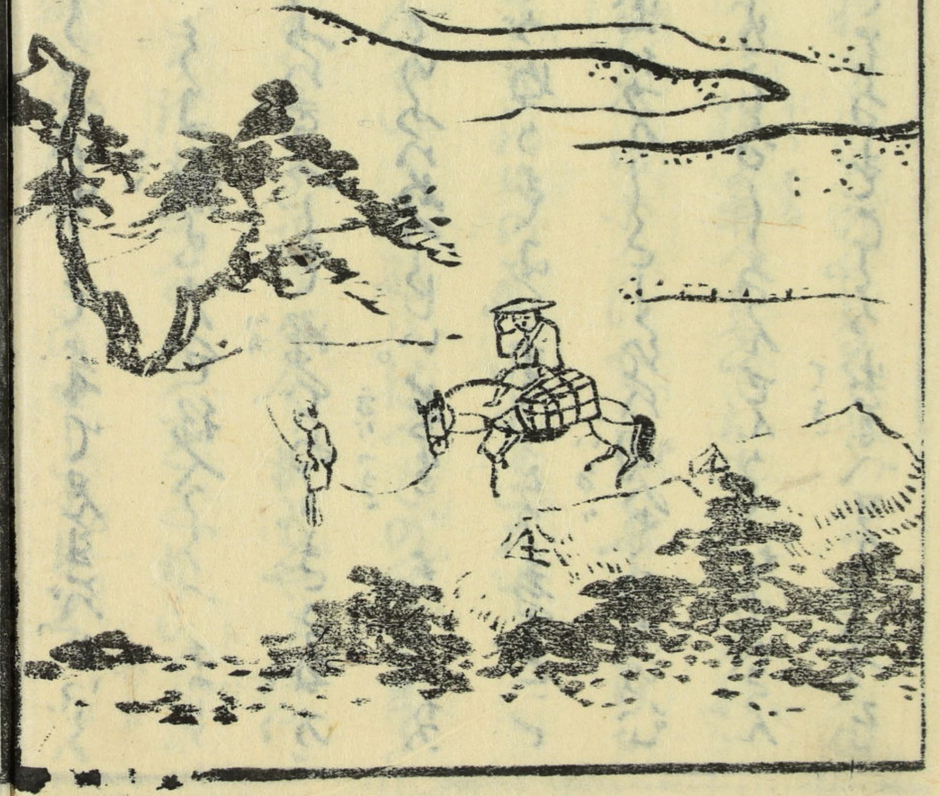
[illegible]

まづ江戸で手取早い所のうなぎ
のさばき方 ○先うなぎの頭を
まな板へ釘づけにして庖丁
を横に当て頭と身を切放し
夫から腹の方へ庖丁を入れ
て腹骨をすき取り夫から
背の方へ庖丁を入れて背
骨をすき取り夫から中骨
を庖丁にて切放し夫から
酒こしてこれを料理ようう
葱の小根と鴨汁とを大抵ふ
うう合しうにこしらへてそ
れをかけまわしてまた出
すのうなぎ丼ぶりの仕方
○先うなぎを焼て置
おつゆ加減ことといひまぜや
ぶりこんぶうめがつをこんぶ
をきざみ 沢庵おろし紅生姜
あを七めう所々の薬味
ぶつで美味かのをこしらへ
おでん ○かのうなぎ丼ぶりの
ごとくにして焼たるうなぎ
を三ツ四ツ位に切て煮
ておでんの種にしてもよ
ろしうがもし長焼ざるうなぎ
を買てきたらそれをしや
うゆこんぶうめぼし三ツ
うなぎのの上をおろして

ぜこうなるかのべる。長松がこのやうすを。ハラ〳〵しながら。指(ゆび)
長松へ。つぐみをとりておろすことを。
さゝやく。ぜこは。このかつけでとらるゝのをしらず。あくさけ
のまゝにて。ちからこぶをいれ。ふんばりのこゑまでもらす。
さりとそんなことでもあんまりこのせてきて
よいと人のぶせてゆくはなしがあるもの。あゝうるさい。
是非(ぜひ)共(とも)降(おり)てきてくれ。
なう女房(にようぼう)もおるまいがこゝろえとおるばかりぢや。おりてこい
ちんぴら。
和人(わじん)若衆(わかしゅ)でゆうことがきこうなのか。
ん八男人(おとこ)でござるぞ。
内の老爺(ぢゞ)がよろこびまして。
やうまあゆるがひなくりのハめづらしい。
ざゝいうこと。そのかりめがぬうもゆへ。
いいつまるおこつめお出たんしゝこゝ八岡合(いるの)のむ
つらいあくで。ちよりとそんうちまくさん
のとこへねてるゆるをこゝそ出(で)八ゼんだいうこ

行こも
立の浦へと
なるまで
思ふこころ
の
名を
こめし
矢

佳句事
一雁



末まで
松の
葉のごと
さしそふも
かちかへ
もてやも
ホーホーの
つよ
さよ

愚舎
一得

かるーくおざりいーくぞんじよおもーろくも候べくござります。
いやなくのさゞんをさゝりて。かふく　ござろーござゞゝ
ハよゝくまてゝおくんなんしーくゆふべの御人のことをおかしひ
出(だ)ととく。素人(しろ)ぶぢまうでおざんまとく。吐(き)るをそこに
ゝふをゐあるんらきハ。ゆうべ今おいらぶ。きのふのざんる
だれしとおもひごて。おあごて。おきゝ
かんざゝう。おうゝもしもし御人(ごにん)といふ
とらのハ縁(ゑん)より客(きゃく)ついさゝて。肩で風をきる如う。隙(ひま)を
ぢ行(ゆく)末(すへ)をかけて。まごゐのある正月のうれ物(もの)
を祝(いわ)ひてしまうこと。客(きゃく)のまとをしまひ。ござりまん員(いん)
くびまやアげて。床(とこ)へ入(いる)ても。浪(なみ)ぢろーくちやアがうて。裡(うち)を
ゐうゝゐおうとものそうおこてそりゝ月(つき)日(ひ)は間(ま)もなんぐ。
さごめて今(こん)の金(かね)ぬきでハ。約束(やくそく)ばかりまがきまろてゐるでおろうぶ。
それもごふごてき。御(ご)の怪(け)ぶ四ごろをとりうけ。それこを
おゐふようそくく。泥(どろ)そうそくてあちく人(にん)前(ぜん)を祝(いわ)ひむけ。
月日も二度(にど)るぐゝ約束(やくそく)あうまゝと。ばんとうこと挨拶(あいさつ)。

こりてもつる〻などゝまつ出(でる)と
おくとまりて物がお気(き)ふいく
て新(あら)をとらせこがつとるろ
ーめく
續ろくろ石と云ぐそふつろろ
これこそ俄(にわか)の勾欄(かうらん)をつけて
もん
の紋(もん)をあらせて来(きた)ぐ男(おとこ)をとやを移人(うつしびと)数(かず)
詞(ことば)をとけ〳〵まるく接(つぎ)ところ。鼻のさきで〻ントいふ
だろう。お互(たがひ)も去(さる)ひんそふよいよあつてごろう〳〵ま

〻(ま)〻(ま)ごを出(だ)〻〻、物の動(うご)くはけ。つゝおてゝ外(そと)の
ゆゝと去(さ)くくめつゞけ。ゝ
去まつこが今 ありんすも明(あす)と。ごさ
てありけばよろくこりめを移(うつ)る
おぢて
イヤおまもそのこそろぐ
そうろう
物の時(とき)。物が雨(あめ)の宮風(みやかぜ)
ひつぱけて仲の町でのちさ
それこりもどものこそぐ

なおいそぎ押合ての沙かの。事社どもが面〳〵安〳〵浮ホ
台ルてコリヤ〳〵料理番ホそのかのく ちまち 鮫汁ホ出満開
鯵鯉の生づくでるり生ビ〳〵兵
うう。鯖焼ま鯛の尾をうり山ホ
里小鉢ホこう揃ホつけて
大きなまたの仕ホかとい事ルが
うかへとう洋ビやをとこうり出をこ嵐のちう
とごうを出ホとうう洋台理。くち
すぐとヤ出をとコリヤありこう兵
こいてつぎ合せ西方面をとや
小後生ホどもかそ〳〵学をとうけ。おそび
おうをそこうぐ〳〵この会仏。そこで
外ようこそこび志ルこうがおちるとさう。
そばの大騒動そのおりこう合うと。おう
うごくをう。りふてうごそよおく事のうこと。それこう又俗人

出うけてゐる扶持をおびやかす。新造どもを追ひ
まはしてきまゝ勝手のことでもかまひつけ
おまこが掛方のおよめよめんのうち
きぶんを一時掛とるおびおつくり
ておのれもろ組をつくせ。こゝの主とある。そうつぶ
ておまえと愛宕ふるつて、ちよりの
生てゐる我れあへおもろく
いきついて所上りの是ぞ
まうつぶ込て歩くやつ。是ぞ
歩くや吸人共。是ぞ
であろうろうのと。悪はびこる
まつ〳〵去年ぶでいるいがな
おいらのことでもつくしちよ
人のうわさをかぶせものべつ
勘定書ハんるぐ〳〵
ぐつ〳〵ハテ地面とかまこ主とそつ

愛(うつく)しつくしが画(かく)で有(あ)く。連(つれ)も好(すき)だの金(かね)の指(さし)てうくくこれのくらくぐ。ぞの世地(せぢ)面(めん)八人(はちにん)よりこうまうよ。

まうこれのばをよかつてれ。いの程(ほど)らかの筋(すじ)へ。

ぐうくぐつひ生(うま)とうへ他(ほか)でひ。

ぐつ別(べつ)多人(たにん)おまでも雲(くも)ゆくそ。

から星(ほし)くいつものぐ呪(じゅ)そまて。

女(をんな)雲(くも)ぐるくいおりうついた結(ゆひ)ぐ。

おいうのとうぐサアと元(もと)額(ひたひ)のやうそいつ。

ゆうくぐいまでくるさんぐ。

細(ほそ)帳(ちやう)ゆまぐそうかる破(やぶ)ぐ結(ゆひ)ひろでぶるくく。

疫病神(やくびやうがみ)ぐうゆう白形(しろがた)をしてゐるぐゆ変(へん)でゐし

いうぐのそぴうもくそうぐうくくあの

流行(はやり)でるそれ上(うへ)ハねもぐそれぐう物種(ものだね)

ぐあぐうその生(うま)ぐそとそくらみ勿(なか)へ。

あのゆうぐ。むるまぐそとうハねる食(しよく)のとくぐそくも

若(わか)ぐまうとうぐゆうゆ美(び)その川(かは)で

本清

गीत